

私と図書館—文献探索のことなど—

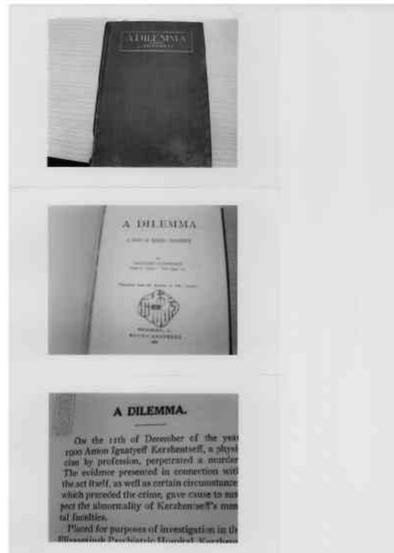
文芸学部教授 河 村 民 部

大学の研究者であれば、誰でも文献の検索に奔走するのは、言うまでもないことではある。研究者の端くれである私の場合も、例外ではない。その際に自分の所属する大学の図書館およびその関連施設が大きな役割を果たしてくれるのも、これまた言うまでもないことである。私の場合も、日本全国の図書館および海外の図書館の利用をはじめ、現在の勤務先の近畿大学中央図書館、前任校の天理大学付属図書館、そしてブリティッシュ・ライブラリーには、これまで特にお世話になった。

ここでは特に上述した三つの図書館を中心に、私の文献検索のことなどをお話し、それぞれの図書館が如何に有益な援助を与えてくれたかの一端を披露したい。

まず近畿大学中央図書館であるが、ここでは特に相互利用係で大変お世話になっている。私の場合比較文学研究が専門領域のひとつであり、幅の広い分野の文献検索が必要となるので、相互利用を通じての文献検索依頼ほど有難いものはない。これまでもいろいろお世話になってきたが、特に漱石関連の文献を所蔵している東北大学付属図書館の漱石文庫探索の橋渡しをして頂いたのは、有難かった。

その成果の一端が、漱石文庫探索の中で発見したレオニード・ニコラエヴィッチ・アンドレーエフ (Leonidas Andreiyeff, 1871-1919) の小説『ムイスリ』(ドイツ語訳『ゲダンケ』) の英訳本である。アンドレーエフというのはロシアの作家で、その名はとっくの昔に忘れ去られてはいるが、明治30年代から40年代にかけて、日本の文壇に大きな影響を与えた。たとえば、上田敏がこの『ムイスリ』をフランス語訳 *L'Épouvante* 所収の *La Pansée* を底本



Andreiyeff, *A Dilemma: A Story of Mental Perplexity* (1910.漱石文庫)

として、『心』という題名で翻訳している。漱石もアンドレーエフの小説には特に関心が深く、『それから』(明治42)では『七死刑囚物語』(1908)へ言及しているが、問題の『ムイスリ』がドイツ語訳の『ゲダンケ』として漱石作品に登場してくるのは、『彼岸過迄』(明治45)の「須永の話」においてである。

漱石はドイツ語の練習のため弟子の小宮豊隆からドイツ語訳『ゲダンケ』をテキストに勉強していたらしい。主人公のドクター・ケルゼンツェフは、結婚申し込みを拒絶した女に腹癒せのため、その女の見ている前でその女の結婚した相手の男を文鎮で殴り殺し、精神病院に入れられ、殺人の手記を書く。この手記が小説になっているわけだが、同じく嫉妬に駆られた男が、この手記を読んで、自分の許婚の女の恋敵を殴り殺す白昼夢を見、

驚愕して夢から覚める場面を描いたのが、漱石の『彼岸過迄』の「須永の話」である。

この『ゲダンケ』が漱石の小説『こころ』と深い関係があることを最初に指摘したのは、比較文学の先輩で、『定本上田敏全集』の編集者でもある剣持武彦氏であった。私は、これは『彼岸過迄』の「須永の話」が元で、そこでは白昼夢で実現しなかった殺人が、実行に移されたのが、漱石の『こころ』であると解釈した。そしてそれを論文にし、さらには拙著『漱石を比較文学的に読む』(近代文芸社、2000)にも収録した。

さて、話は回りくどくなったが、拙著出版の折に、東北大学付属図書館で漱石文庫を閲覧していて発見したのが、在るとは思われていなかった『ゲダンケ』の英訳であり、そのタイトルは、*A Dilemma: A Story of Mental Perplexity* (Trans. By J. Courmos. Philadelphia: Brown Bros., 1910. Modern Author's Series) であった。

また拙論を書く上で欠くことのできない、しかも出所不明であった剣持武彦氏の論文<夏目漱石「こころ」と上田敏訳アンドレイエフ「こころ」> (『道』世代群評社、昭56) を入手するのに骨を折ってくれたのが、近大中央図書館相互利用係の熊井あづささんであった。剣持氏からあとで、よく探してくれたと感謝されたが、これで二人して漱石文学におけるアンドレイエフの影響力の大きさをある程度証明できたのではないかと考えている。

アンドレイエフの話が出たついでに、天理大学付属図書館には、他に見られないアンドレイエフの翻訳が蔵書されており、拙論を書く際にも、大いに参考にさせてもらったことを述べておきたい。たとえば、中村春雨譯『沈黙』(杉本梁江堂、明42)、同訳者による『信仰』(杉本梁江堂、明42)あるいは伊藤欽二譯(『救ひなき祈り』(杉本梁江堂、大10)、長谷川二葉亭譯『血笑記』(赤い笑い)(易風社、明41)などである。

その他、天理大学付属図書館には、これまで拙著『山頂に向う想像力——西欧文学と日

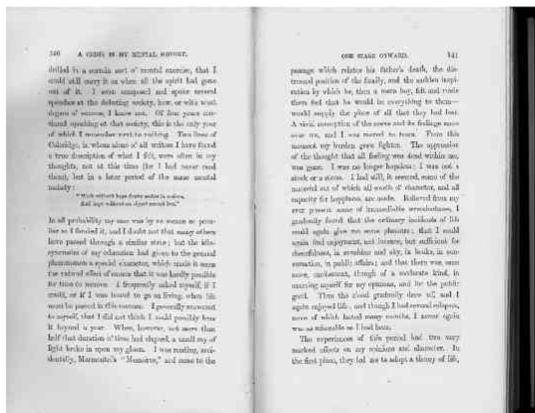
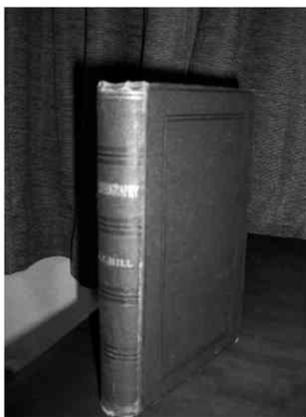
本文学』(英宝社、1996)を書く際にも、多くの貴重な資料のお世話になったし、また最近出した拙著『「岬」の比較文学——近代イギリス文学と日本文学の自然描写をめぐる』(英宝社、2006)執筆にあたっては、一世を風靡しながら、今では忘れ去られてしまっている大正時代の紀行文作家たち大町桂月、吉田絃二郎、吉江孤雁などの紀行文、たとえば、桂月の『行雲流水』(博文館、明43)をはじめ、『関東の山水』、『箱根山』、『大和田湖』など、また絃二郎の『霧島紀行』、『山を戀ふ』などを収録した『現代日本文学全集』(改造社、昭4)、あるいは孤雁の『自然美論』(大15)を収録した『現代日本文学全集』(改造社、昭5)など、利用させてもらった。天理大学付属図書館は、古典文学の収集で有名であるが、それだけではない。明治をはじめとする近代文学の文献も豊富で、私など比較文学の論文書きで困ったときには、必ず寄せてもらうことにしている。いつも期待を裏切らない。

さらに近畿大学中央図書館で私が世話になったのは、収書・整理課の岡友美子さんである。私の元同僚でつい数年前に逝去したD.H.ロレンス(D.H. Lawrence)の研究者として知られた朝日千尺氏の膨大なロレンス文献を寄贈したいという御主人の申し出を受けて私が仲介をさせて頂くと、岡さんは、中央図書館にロレンスコーナーを設置し、その蔵書の保管に尽力して下さった。これで中央図書館は、世に誇れるロレンス文学関係の貴重な資料の宝庫となった。内外の研究者にも是非利用してもらいたい。

もう一つ岡さんには、古書の修復で、個人的にもお世話になったことがある。これも最近のことであるが、春先であったであろうか、何気なくテレビを見てみると、古書の修復を専門にやっている工房の紹介があって、私は古書狂いなので、途中からであったが、魅入られてしまい、もしやと思っていると、期待に違わず近畿大学中央図書館の映像が出てきて、期待の本人が登場したのには驚いた。

というのも、私はイギリスに出かけると、

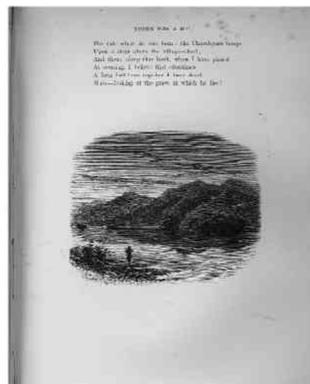
必ず気が狂ったように古書店巡りをして、カーフやラム・ツリーと呼ばれるような絶品の革装丁の古書を収集することにしている。とはいっても、時間とお金のない者の場合であるから、たかが知れた話ではある。以前オークションで落としたサー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott) の全集25巻 (*The Waverly Novels*, 1857) の一冊の背表紙が傷んでいて、これをいい加減な修理屋に頼んだら、背表紙を簡単に剥され、何のことはない、改めて貼り付けられただけで帰ってきた。その他にも、大切なヘンリー・ジェームズ (Henry James) の初版本 *What Maisie Knew* (1897)、*A Small Boy and Others* (1913)、*The Golden Bowl* (1904) などの修復を依頼したら、表紙を取り外して、新品に入れ替えられてしまった苦い経験がある。



J.S. Mill, *Autobiography* (Longmans, Green, Reader, and Dyer, 1873.初版)

もう懲りているから、日本ではとても本物の古書修理など出来る者はいないと諦めていた。ところが、である。最近 J.S.ミル (J.S. Mill) の『自伝』(*Autobiography*, 1873) を読む機会があり、これを読んでいくうちに、驚くべき事実に直面した。父親の信奉するベンタム流の功利主義経済論を叩き込まれ、幼い頃からイギリスきっての英才教育を施されてきた合理主義者ミルが、青年期に達すると、もう自分にはモノに感じるという感覚が麻痺し、無くなってしまったのではないかと思ひ、絶望の淵に沈淪するようになる。このときミルをその絶望の淵から救出した書物が二つあった。その一つが、フランスの政治家であり文人であったマーモンテル (Marmontel) の『自伝』であり、もう一つはイギリスロマン派の巨匠ウイリアム・ワーズワス (William Wordsworth) の詩集であった。

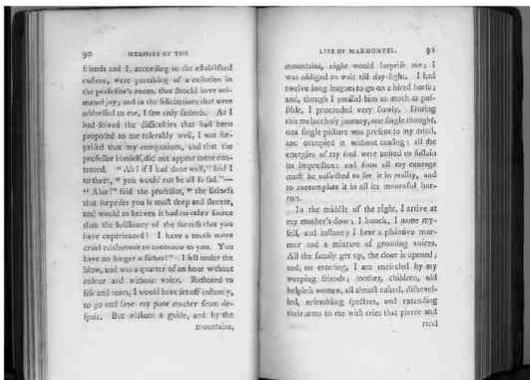
マーモンテルは田舎の貧しい家の出であっ



Poems of William Wordsworth ed. by Robert Aris, Willmot (George Routledge & Co, 1856)

たが、父親が生きている間は近くの学校の寄宿舎に入り、いずれ将来は牧師になろうという大志を抱いて勉学に勤しんだが、やがて突然父親がなくなり、母親をはじめ弟妹の生計を一身に背負い、代理父として生きていかねばならず、丁稚奉公のようなことをして独学で苦勞しながら牧師を目指すその主人公の姿が、ミルの心を打ったのであった。それともう一つ、ワーズワスの詩に感動し涙を流したミルは、このような合理主義の世の中だからこそ詩が如何に大切であるかを思い、詩の教育の大切さを訴えたパンフレットや詩論を書くことになるのである。I.T.化と勝ち組驀地の只中にあるわが国のリーダーには、特に肝に銘じて頂きたいミルの言葉である。

それはさておき、なぜ古書と岡さんかであるが、ミル自伝の中の『マーモンテルの自伝』



Memoirs of Marmontel (English tran., Longman, Hurst, Reeds, and Orms, 1805)

の英訳 (*Memoirs of Marmontel*, English tran., 1805) の初版本全四巻を入手した私は、その一巻目を早速拡大コピーすることにした。ところが、永の年月開けても見られなかった古書、恐らくミル自身が手にとって読んだかもしれないその書物を、こともあろうにガバと開いてコピー機にかけたのであるから、堪ったものではない。バラバラに解体してしまった。それを相談に持ち込んだのが、中央図書館の岡さんの所であった。それで岡さんの紹介で、先ほどのテレビに出てきた古書修理工房「アトリエ・BOOK・クンスト」に依頼してもらい、今度は、期待に違わず見事に復元されたものが、帰ってきた。そして、その工房の主、板倉正子さんからの伝言で、岡さんから、このような古書は、コピーなどしてはいけなそうので、そっと優しくいたわるようにして読むこと、だと教わった。女性も古書も扱いが肝心であると、今さらながら肝に銘じた次第である。

最後に、イギリスのプリティッシュ・ライブラリーに眠っている稀観本を私が発見した話をして、終わりにしよう。それは私がここ何年もかけて研究中の〈ヴィーナスとタンホイザー伝説〉をめぐる話で、元はといえば、私が漱石の小説『行人』で兄一郎が取り上げるG.メレディス (George Meredith, 19世紀イギリス小説家、いわば漱石の小説のお師匠さん) の書簡で、メレディスがヴィーナスとタンホイザーに言及していることに注目したからである。それで、そのメレディスが読んだと手紙にいうタンホイザーの詩とは、どのようなもので、誰が著者なのかを調べることにした。その詩が載ったというポスト紙をはじめ様々な文献を調べたが、判らないで困っているうち、ついにその詩は『タンホイザーあるいは歌合戦』(*Tannhäuser or the Battle of the Bards*) という題の長編詩で、ネヴィル・テンブルとエドワード・トレヴァー (Neville Temple & Edward Trevor) という二人のペンネームで書かれ、1861年出版の第三版がプリティッシュ・ライブラリーに貴重本として保管されていることを発見し、マクロフィルムに

撮影したものを送ってもらい、読むことができた。これは感動的であった。さらにこの詩集の書評までも、当時のタイムズ紙（1861年8月2日）に掲載されていることもわかり、これも読むことができた。

もちろん、元もとの関心の出所である漱石の『行人』との関わりの解明をはじめとして、膨大なくヴィーナスとタンホイザー伝説の解明に向けて、苦手なドイツ語の古い文献を読むべく、まさに六十の手習いを始めているところである。